

Title	「言われていること」と真理条件
Sub Title	Le dit d'un énoncé et ses conditions de vérité
Author	喜田, 浩平(Kida, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.3 (2006. 12) ,p.297(32)- 309(20)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鷺見洋一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910003-0309

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「言われていること」と真理条件

喜田 浩平

はじめに

発話で「言われていること」とは、すなわちその「真理条件」のことであろうか。現代の言語学的な意味論・語用論研究の代表的な研究者¹の間では、この二つの概念が無批判に同一視される傾向にある。その問題点をフランス語の具体的なテキストの分析を通じて明らかにしたい。

小咄一席

一部のフランス人が好んで語る *histoire belge* というものがある。「ベルギー・ジョーク」あるいは「ベルギー小咄」とでも訳せるもので、いわゆるエスニック・ジョークの一種として分類できるだろう。ベルギー人は頭の働きが鈍いと決めつけ、その言動を滑稽に描くことで笑いを誘う仕組みになっている。そこに差別的な意図はない、ベルギー人に対する愛情の表れである、と弁解する者もいるが、ベルギー人にとっては不愉快なものであることに変わりはないようである。次の文章はそのような笑い話の一つであるが、ここでこのような例を取り上げるのは純粹に言語学的目的によるものであり、本稿にベルギー人を嘲弄する意図はないのでご了承いただきたい。

C'est l'histoire d'un mec qui dit à un autre mec :

— Je vais vous raconter une histoire belge !

— Mais vous savez, je suis Belge !

— Ça fait rien, je la raconterai deux fois !

(Coluche, *L'horreur est humaine*, Livre de Poche, 1994, p.153)

後続の議論を円滑に進めるため、インフォーマルな形で話のポイントを整理しておこう。まず登場人物は二人、名前は記されていないが最初の発言者はフランス人のようであるので、仮に F としておこう。二番目の発言者はベルギー人のようなので、B としておこう。最後の台詞は再び F の発するものである。話の流れは次のように要約できる。F が「ベルギー人を揶揄する笑い話をします」と宣言すると、B が「私はベルギー人です」と言う。この B の発言の意図は様々に解釈できるが、おそらく自分がベルギー人であると示すことで F に対して「ベルギー人の前でベルギー話をするのは失礼だ」ということを伝え、さらには話そのものを止めるよう促している、と考えるのが妥当であろう。これに対して F が「二回話します」と応じる。何故「二回」なのか。その解釈がこの話のカギであり、読者がそれに気付くかどうか重要で、そこが笑いの生まれる分岐点となる。一般に、同じ話を二回繰り返すのはどのような場合であろうか。おそらく、相手は何らかの理由でその話を十分に理解できないと予測される場合であろう。繰り返すことが理解を助長するだろうと期待するのである。では、B が F の話を十分に理解することができない可能性があるとするれば、それにはどのような原因が考えられるだろうか。話の内容が複雑であるからかもしれないし、騒音などによって物理的に話を聞き取ることが困難なケースもあるかもしれない。しかし、ここで最も検討に値する仮説は、B の側の理解力に問題がある、例えば知能が十分に発達していない、平たく言えば「頭が悪い」、というものではないだろうか。ここまで思考を巡らせると読者は F が B の発言意図を取り違えたか、あるいはわざと取り違えたふりをしていることに気付く。B は「私はベルギー人です」と言うことによって、F の行動を非難し抑制しようとしたのだが、F はこの発言を B の頭の悪さの表明、あるいは話を理解できないかも知れないとい

う懸念の表明と受け取ったのだ。B 自身は現実には自分の頭が悪いとは言っておらず、またそう言うつもりもないはずだが、あたかもそうであるかのように F が振舞う点にユーモアの源泉がある、と分析できる。

さて、読者の視点から遡行的にユーモアの発生過程を素描すると以上のような形になるが、最も重要なポイントである *Je suis Belge* の部分だけに焦点を絞り、その複雑な意味が F と B にとってリアルタイムで構築される過程を図式化しながら整理してみよう。この発言には少なくとも三つの情報が複雑に絡まり合っている。まずこの発言そのものの意味、つまり B がベルギー人であるという情報である。これを S_1 としよう。この情報には誤解の余地がなく、F も正しく理解しているはずである。次に *je suis Belge* のどこにも明言されていないがそこから間接的に（二次的に）伝わる情報が二つある。一つ目は、B 自身が *je suis Belge* と発言することで、F に伝えたいと思い、F が正しく理解することを期待している情報である。これを S_2 としよう。 S_2 は上記の表現を繰り返すならば「ベルギー人を揶揄する笑い話をするのは失礼だ」あるいは「ベルギー人を揶揄する笑い話をするのは止めてください」といったところだろう。結果的には S_2 は F に伝わらなかった。そして B の発言 *je suis Belge* が間接的に伝える二つ目の情報は、ここから F が実際に受け取った情報である。これを S_3 としよう。 S_3 は「B は頭が悪い」あるいはその結果「F の話を理解できないかもしれない」という類のものである。なお、F は巧妙なレトリックを駆使し、 S_2 を理解していないどころか正しく理解しているにもかかわらず知らないふりをし、悪意を持って S_3 を B の発言に結びつけている可能性もある。現実にはベルギー人を揶揄する笑い話をするフランス人ならば、それぐらいのことはやってのけるかもしれない。しかしその真偽のほどは判定できない（そこがまた巧妙なところなのだが）。それにこの問題は今後の議論には本質的ではないので、これ以上立ち入らないことにしよう。

文・発話・意味

笑い話の分析を進めて行く過程で三つの情報 S_1 、 S_2 、 S_3 を区別したが、

その相互の関係を、現代の意味論や語用論の研究で広く共有されている発話モデルの中で再解釈してみたい。いくつかの基本的概念を導入する。

まず「文」と「発話」の区別が重要である。「文」(仏 *phrase*、英 *sentence*) は統語規則に従って語が結合されることにより生み出される構造を指す。文は具体的言語使用よりも論理的に先行する抽象的実体であるが、理論的に想定されるのみで観察の対象にはならない。例えば Jeff が *Je suis belge* と言い、Gaston も *Je suis belge* と言ったと仮定しよう。これは個別的な言語の使用例としては異なる現象であり、言語音の連続体としては全く異なるものである(後述の「発話」参照)。しかしそれにもかかわらず、両者に共通の構造が存在すると考えることもできる。これが「文」である。本稿では文またはその部分を表記する場合に、便宜上 < > という記号を使うことにする。Jeff と Gaston の例では、<Je suis belge> という共通の文を二人の話し手が使用した、という言い方ができる。

一方、「発話」(仏 *énoncé*、英 *utterance*) は文を具体的な場面で使用することによって形成される。言語の使用に関して、現実には観察されるのは常に「発話」である。上の例では、Jeff が *Je suis belge* と言った場面ではその発言が一つの発話を形成し、Gaston が *Je suis belge* と言った場合はもう一つ別の発話が形成される。発話は一つ一つが個別的なものであるため、定義上、「同じ発話」というものは存在しない。Jeff と Gaston の例が示すように、一つの共通する文を異なる話し手が使用すると異なる発話が形成される。また、同じ一人の話し手が同じ一つの文を複数回にわたって使用する場合も、そのたびごとに異なる発話が形成される。例えば Jeff が 2006 年 9 月 23 日に *Je suis belge* と言った場合と、2006 年 9 月 24 日に *Je suis belge* と言った場合では、二つの異なる発話が形成される。要するに発話がトークンであるのに対し、文はタイプである。

文と発話が区別されると、それぞれの「意味」も区別される。文の意味は、それを構成する語が「規約」的に持つ意味を組み合わせで構成される。「規約」(仏 *convention*、英 *convention*) とはルール、規則、取り決め、などのことで、言語体系に内在する規則のことである。語の規約的意味から

文の意味が構成されるプロセスそのものも意味論の重要な研究課題であるが、ここではその問題には立ち入らない。重要なのは、文の意味は一定不変で、発話状況や文脈に依存せず常に同じということである。Jeff が使用しても Gaston が使用しても文 <Je suis belge> の意味は変化しない。ではそれは具体的にどのようなものかという問題が生じるが、その記述そのものは本稿の目的ではないので割愛する。しかし大雑把に言って、<Je> の規約的意味は「発話者を指示対象とする」、<belge> の規約的意味は「ベルギーという国の国民である、そしてある種の共通の性質を持っている」、<suis> の規約的意味は「一人称主語代名詞の指す対象が属詞の表す性質を持っている」、というようなもので、それらを総合したものが文 <Je suis belge> の意味を形成すると考えてよいだろう。

発話の意味は具体的な言語使用の場面で発話に結び付けられる様々な解釈の総体である。Jeff の発話 Je suis belge は Jeff がベルギー人であることを意味する（それに加えてさらに様々な意味を持つ可能性もあるが、後述）。Gaston の発話 Je suis belge は Gaston がベルギー人であることを意味する（それ以外の意味については後述）。いずれも文 <Je suis belge> の意味（規約的意味）そのものとは異なる。

ところで、発話の意味は場合によっては複雑な様相を呈することがある。次の例を見てみよう。

Pierre : — Tu aimes la bière?

Jeff : — Je suis belge.

このような発話状況で Jeff の発話がどのような意味を持つか考えてみよう。まず Jeff がベルギー人である、ということの意味するのは間違いない。これを意味 1 としておこう。さらに、Pierre の質問に対する返答である点を考慮すると、一つの可能性として Jeff はビールが好きであるということも意味するかもしれない。これを意味 2 としよう。意味 1 も意味 2 も Jeff の発話の意味であるという点で共通している。しかしそこに何ら

かの性質の違い、あるいはレベルの違いを認めることができないだろうか。Grice(1975)(1989)は、意味 1 のようなものを発話で「言われていること」(what is said)と呼び、意味 2 を「含意されていること」(what is implicated)と呼んで区別している。それぞれの実質がどのようなものかという問題²を巡って烈しい議論が展開されているが、その点にはここでは触れず、発話の二つのレベルの呼称としてのみ採用することにしよう。

発話の二種類の意味を区別することに関して、直感に頼るだけではなく、もう少し説得力のある根拠をいくつか挙げることができる。少なくとも次のような三つの観点から比較すると違いが明確になるだろう。まず第一点目は、文の意味からの「距離」が近いか遠いか、という観点である。「言われていること」は文の意味に極めて近い。Jeff が *Je suis belge* と発話する場合、「言われていること」の構築過程を数学的比喩を用いて表現するならば、文 <*Je suis belge*> の <Je> の部分に Jeff という「値」を「代入」することで獲得されると言えるだろう。これに対して、「含意されていること」は文の意味からは遠く離れたものである。文 <*Je suis belge*> の意味に単純な操作を施すだけでは Jeff がビール好きであるという意味には到達できない。

発話の二種類の意味を区別する根拠の第二点目は、それぞれが構築されるプロセスの違いによって与えられる。上述のように「言われていること」は文の意味にいくつかの操作を加えることで獲得される。文の意味を「骨格」として、それに「肉付け」するイメージである。では、「含意されていること」はどうだろうか。このタイプの意味は、他ならぬ「言われていること」を出発点として、そこに推論を働かせることで導き出される。また、その際に必ずしも言語的には明言されていない一般常識などによる暗黙の前提が動員されるのも特徴である。Jeff とビールの例では、対話相手の Pierre が (あるいはそこに偶然居合わせた第三者も、また我々読者も) まず Jeff の発話で「言われていること」を理解し、「ベルギー人はビールが好きだ」というような知識に鑑みて「Jeff はビールが好きだ」という結論を導くことになる³。

「言われていること」と「含意されていること」を区別する根拠の三つ目は、「却下可能性」である。ここで「却下」とは、発話者が「自分はそんなことは言っていない」と言いながら自らに帰された内容を拒絶する行為を指す。発話者は自分の発話で「言われていること」を却下することはできない。Jeff が *Je suis belge* と発話した後、自分がベルギー人であることを否定するような発言を続けると完全な自家撞着である。しかしビールの例で、「ビールが好きである」という内容は場合によっては却下することができる。Jeff の発話を受けて Pierre が「じゃあ君はビールが好きなんだね」と指摘したと仮定しよう。これを受けて Jeff が「そんなことは言っていない、ベルギー人だけどビールは嫌いだと言うつもりだったんだ」と続けても矛盾はしていない。「含意されていること」は聞き手が自由に（勝手に）受け取った情報であり、話し手の意図とは異なる可能性がある。

以上のような根拠により、「言われていること」と「含意されていること」の区別の正当性が確立されたとしよう。本稿でも、この区別そのものは妥当なものとして受け入れたい。そのような前提で、笑い話を分析する際に取り出した三つの情報を分類するとどうなるだろうか。まず S_1 は発話 *je suis Belge* の「言われていること」であると考えてよいだろう。そして S_2 と S_3 は、この発話の「含意されていること」であると考えられる。その結果、話の全体は、ベルギー人 B がその発話 *je suis Belge* によって「含意されていること」 S_2 をフランス人 F に伝えようとしたが、F はこの発話から別の「含意されていること」 S_3 を導き出した、と分析できるだろう。

ここまでは特に問題ない。ところが更に議論を進めると、「言われていること」という概念をめぐってこの笑い話が重要な問題を提起することになる。

真理条件

現代の意味論・語用論研究では、「言われていること」を特徴づけるために、「真理条件」の概念を導入する。発話の「真理条件」(仏 *conditions*

de vérité、英 truth conditions) とは、その発話が「真」であると認定されるために世界が満たすべき条件のことである。換言すれば、発話の真理条件を特定することは、世界の事物がどのような状態にあるか見極めることに等しい。

真理条件の概念を発話の意味の分析に利用する立場は様々な問題を提起する。まず、この態度の根底に前提されている世界観・言語観が議論の対象となる。要約すると、(i)言語とは別次元のところに、事物から構成される「世界」が存在する、(ii)言語と世界には対応関係がある、という考え方である。あまりにもナイーブな考え方なので、様々な批判に晒されることだろう。しかし本稿ではこの問題にはこれ以上立ち入らない。

また、全ての発話に真理条件を規定できるかどうか議論の余地がある。例えば、「花子は美しい」「イラク戦争は正しい」などの発話が「真」になる客観的条件はどのようなものか問うことに意味があるだろうか。これに対して、「花子は独身である」「イラク戦争は 2003 年に始まった」のような発話ならば真理条件を規定することは不可能ではない。以下では、一部の発話に関して真理条件を規定することは可能であるという前提で議論を進めよう。

さて、真理条件の概念をこのように緩やかに理解した上で、具体的にどういうものであるか、いくつかの例で確認しておこう。Jeff est belge という発話の真理条件は、言及されている Jeff という人物がベルギー人であることである。Pierre est français という発話の真理条件は、Pierre という人物がフランス人であることである。では、Le président de la République est marié の真理条件はどのようなものであろうか。それを規定するためには発話状況を考慮する必要がある。2006 年 10 月 1 日にこの発話が行われたとすると、その時点で Le président de la République は Jacques Chirac を指すので、この発話の真理条件は Jacques Chirac が結婚していることである。しかし真理条件の担い手が発話ではなく文であるとする立場もあり、その観点からは異なる帰結が導かれるかもしれない。しかしここではこれ以上この問題には立ち入らない。

それでは、Je suis belge の真理条件はどのようなものであろうか。真理条件の担い手はあくまでも発話であると考えれば、この発話の真理条件は Je が指す人物の違いに応じて変化することになるだろう。Jeff が Je suis belge という場合、この発話の真理条件は Jeff がベルギー人であることである。Gaston が Je suis belge という場合、この発話の真理条件は Gaston がベルギー人であることである。

ところで、この考え方を押し進めると、興味深い帰結が導かれる。次の四つの発話を比較してみよう。(a)Jeff が Je suis belge と発話する。(b)誰かが Jeff に向かって Tu es belge と発話する。(c)誰かが Jeff を指して Il est belge と発話する。(d)誰かが Jeff est belge と発話する。同じ状況で、同じ Jeff が問題になっている場合、この四つの発話の真理条件は同じである。つまり、異なる発話が同じ真理条件を持つ場合があるのだ。

以上で議論の枠組みは整ったので、問題の核心に入ることにしよう。発話で「言われていること」と真理条件は同じであるか否かという問題である。

「言われていること」= 真理条件？

具体例で検討してみよう。まず Jeff とビールの例で、Jeff の Je suis belge という発話で「言われていること」はその真理条件、すなわち Jeff がベルギー人であることと考えて差し支えないだろう。Jeff 自身がこの内容を自覚しており、また話し相手の Pierre にも同じ内容が伝わっていると考えるのが自然である。

では笑い話ではどうだろうか。ここで重要な点を確認しておこう。上記の分析では、冗談を言おうとした男（おそらくフランス人）を F とし、その相手（おそらくベルギー人）を B とした。しかしこれはあくまでも便宜上の取り決めであって、実際には二人の名前は明かされていない。とりわけ、ベルギー人の身元が不明である点は重要である。これは読者にとってそうであるだけでなく、フランス人（と思われる男）にとっても同様である。その確証はないものの、それを否定する材料もないので、以

下ではフランス人（と思われる男）はベルギー人の名前を知らないという仮定の下に議論を進める。（なお、*Mais vous savez* は相手の注意を促す表現であり、「あなたもご存知のように」の意味ではないため、二人が知り合いであることの根拠にはならない。）

それでは、笑い話の *je suis Belge* の「言われていること」と真理条件の比較をしよう。仮にこの発話の話し手の名前が *Jeff* であるならば、その真理条件は *Jeff* がベルギー人であることである。しかしこれを「言われていること」と考える訳にはいかない。なぜなら、フランス人（と思われる男）は相手の名前を知らないからである。「仮に *Jeff* と呼ぶ」としたが、名前が *Gaston* であっても事情は同じである。フランス人（と思われる男）はベルギー人の名前を知らない以上、その発話の真理条件に到達することは不可能である。

ではフランス人（と思われる男）にとって、*je suis Belge* の「言われていること」はどのようなものだろうか。おそらく、「この男はベルギー人である」あるいは「*je suis Belge* と発話した男はベルギー人である」、「目の前にいる男はベルギー人である」という類のもの⁴であろう。いずれにせよ、知らない相手の名前を含んだ形にならないのは確かである。

なお、*je suis Belge* の「言われていること」をこのように考えることは、以下の二つの理由によりいっそう説得力のあるものとなる。まず第一に、*je suis Belge* と発話するベルギー人にとっても事情は同じである、という点である。自分を明らかに知らない相手に対して *je suis Belge* と発話する者は、仮に名前が *Jeff* であるとして、その発話が相手によって「*Jeff* はベルギー人である」という意味に理解されるだろうと期待することは通常あり得ない。そのように楽観するベルギー人を登場させればまさに滑稽な話を作ることも可能であろうが、それは別問題である。*je suis Belge* と発話する者が意識する「言われていること」、しかも相手に正しく理解されることを期待する「言われていること」は、「この男は...」あるいは「*je suis Belge* と発話した男は...」という形を取るはずである。

もう一つの理由は、「言われていること」の持つ特徴に関係する。既に

指摘したように、「言われていること」は、そこから「含意されていること」が導かれる出発点になるという特徴があった。笑い話の *je suis Belge* の「言われていること」を「この男はベルギー人である」と考えても、そこから「含意されていること」を導くことに何ら問題はない。上記のようにこの発話から S_2 （「失礼だ」）と S_3 （「頭が悪い」）という二つの「含意されていること」が導かれると仮定したが、 S_2 は「Jeff の前でベルギー話をするのは失礼だ」ではなく、「この男の前でベルギー話をするのは失礼だ」とする方がより正確であり、 S_3 も「Jeff は頭が悪い」ではなく、「この男は頭が悪い」とすべきである。そう考えるならば、いずれも「この男はベルギー人である」から導くことができるのは明らかである。

おわりに

本稿では、笑い話の *je suis Belge* の「言われていること」と真理条件を同一視できないことを主張した。何故そのようなことになるのだろうか。その最大の原因はおそらく、「真理条件」の概念が、いわば「神の視点」によって規定されていることではないだろうか。換言すれば、言語によるコミュニケーションを外部から観察する視点であり、当事者・参加者の視点とは必ずしも一致しないのである。一方、「言われていること」はもっと限定的なものである。とりわけ発話の聞き手が解釈する際に、様々な制約を受ける。

とはいうものの、真理条件の概念そのものが無意味であるということにはならない。それを「言われていること」と等価と考えて始めて、様々な問題が発生するに過ぎない。従って、「言われていること」と「含意されていること」の区別はあくまでも正当なものであるとの前提で解決策を探るならば、少なくとも二つの可能性が考えられる。一つは、真理条件の概念を精緻なものにして「言われていること」の分析に適合させることである。もう一つは、真理条件の概念を放棄しつつ、「言われていること」を特徴づける方法を模索すること⁵である。

注

- 1 ここで念頭にあるのは、Paul Grice に端を発し、その基本的アイデアを批判的に継承している研究者、例えば「関連性理論」(Relevance Theory) にコミットする人々、あるいは関連性理論に距離を保ちつつも極めて親近性のある近年の François Recanati などである。Grice については Grice (1975)(1989)参照。また関連性理論については Sperber & Wilson (1995)および今井(2001)、西山(2004a)(2004b)、東森・吉村(2003)、Blakemore(1992)参照。Recanati の最新の考え方には Recanati(2004)で触れることができる。
- 2 とりわけ「言われていること」をどのように規定するかということが大きな問題になる。Grice 自身は文の意味に最小限の操作を加えて獲得される内容を「言われていること」とみなした。関連性理論の研究者や Recanati はさらに複雑な操作を加える必要性を強調している。なお、関連性理論ではそのようにして獲得される内容を「明意」(expliciture)と呼び、Grice の「言われていること」と区別している。
- 3 ただし実際に利用される知識はもう少し緩やかなもの、例えば「ベルギー人の多くはビールが好きだ」あるいは「例外もあるが一般にベルギー人はビールが好きだ」というものであろう。また導かれる結論も断定的なものではなく、「Jeff はおそらくビールが好きだろう」というような推測を含んだものであろう。
- 4 これらが je suis Belge という発話の真理条件であるという考え方もできるかもしれない。例えば Perry(1993)が「反射的命題」(token-reflexive proposition)について言及する際、そのような立場を支持しているものと思われる。なお、Recanati(2004, p.65-67) は反射的命題を発話の文字通りの意味とみなす立場を批判している。
- 5 Ducrot(1984)はそのような可能性を示唆している。

参考文献

- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』、大修館書店。
- 西山佑司 (2004a) 「意味、真理条件、認知」、松田隆美編、『西洋精神史における言語観の変遷』、慶應義塾大学出版会、31-65。
- 西山佑司 (2004b) 「語用論の基礎概念」、田窪行則ほか編、『談話と文脈』(言語の科学 7)、岩波書店、1-54。
- 東森勲、吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開 — 認知とコミュニケーション』(英語学モノグラフシリーズ 21)、研究社。
- Blakemore, D. (1992) *Understanding utterances: An introduction to pragmatics*,

- Oxford: Blackwell. (邦訳：武内道子ほか訳、『ひとは発話をどう理解するか — 関連性理論入門』、ひつじ書房、1994。)
- Ducrot, O. (1984) *Le dire et le dit*, Paris: Editions de Minuit.
- Grice, P. (1975) “Logic and Conversation”, P. Cole & J. Morgan (ed.), *Syntax and Semantics 3 : Speech Acts*, New York: Academic Press, 41-58. (仏訳：F. Berthet et M. Bozon (tr.), «Logique et conversation», *Communications* 30, 1979.)
- Grice, P. (1989) *Studies in the Way of Words*, Cambridge, MA: Harvard University Press. (邦訳：清塚邦彦訳、『論理と会話』、勁草書房、1998。)
- Perry, J. (1993) *The Problem of The Essential Indexical and Other Essays*, Oxford: Oxford University Press.
- Recanati, F. (2004) *Literal Meaning*, Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳：今井邦彦訳、『ことばの意味とは何か — 字義主義からコンテクスト主義へ』、新曜社、2006。)
- Sperber, D. & D. Wilson (1995) *Relevance : Communication and Cognition* (2nd ed.), Oxford: Blackwell. (邦訳：内田聖二ほか訳、『関連性理論 — 伝達と認知』、研究社出版、1993。仏訳：A. Gerschenfeld et D. Sperber (tr.), *La pertinence : communication et cognition*, Paris : Editions de Minuit, 1989.)